

ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤 優

(聞き手＝小峯隆生・筑波大学非常勤講師)

※外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称した講座を不定期でおこなっている。私の講座に、佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、始めたのが、このワークショップ。新しい世界観を身につけるべく、今月も、ともに学んでいこう。

第 13 回

日本人とキリスト教②ーバチカンの世界戦略

佐藤 前回取り上げたニュース、2013年2月28日にローマ教皇のベネディクト16世の生前退位は、バチカンの世界戦略であると述べましたが、今回は、そのバチカンの世界戦

——教皇無謬説って、前回学んだ教皇不可謬性と同じですか？ 「教皇の立場で表明した教義と倫理に関する言説は絶対に正しい」っていう……。

佐藤 はい、同じです。

——教理聖省ってなんですか？

佐藤 昔の異端審問所です。

——異端審問所？？？

佐藤 中世では、ある人物が異端であるか否かを、魔女裁判にかけられていました。それが、いま教理聖省と呼ばれているのです。先のキュンク教授を聴聞し、のちに教理聖省の長官、そして教皇となったのが、昨年生前退位したベネディクト 16 世です。

——おっ、人物がつながってきましたね。聴聞の結果はどうだったのですか？

佐藤 有罪です。キュンク教授の説は、教会の規範的な教えに則していないという結論が出ました。

この結果について緒方先生は、カトリック教会が共産圏での勢力の巻き返しを^{もくろ}^み論んでいるのだと教えてくれました。そのためには、教会の指示命令系統を明確にしなくてはならない。だから、教皇の無謬性に疑義を呈するキュンク教授を有罪とした。ヨハネス 23 世の改革路線を軌道修正しようとしているのだ、と。

こうしてバチカンには、強大な権限を持つようになっていきます。

バチカンの教皇は、言うなれば、代表権をもっている“会長兼社長”のようなものです。そして、“執行役員”ともいふべき^{すう}^き^{きよう}枢機卿は、次の会長兼社長を選出する人事権だけを持っている。でも、それを行使できるのは、会長兼社長である教皇が変わる時だけなのです。

そうすると、代表権を持っている唯一無二のトップが、老いて高齢となり、体力が衰えると、その衰えはそのまま、組織の衰えとイコールになってしまいます。

——だから生前退位だったのですね。

佐藤 ベネディクト 16 世（ヨーゼフ・ラッツィンガー）は、何を考えていたのか。彼は、2006 年 9 月に、イスラム教のジハード（聖戦）を批判しています。

個人的な発言ではなく、バチカンの世界戦略の一環として。

——キリスト教はイスラム教に、何をしようとしているのですか？

佐藤 台頭するイスラム教を封じ込めて、カトリックが巻き返えそうとしているのです。

バチカンの世界戦略の第一段階は、ヨハネ・パウロ2世のとき、共産主義体制を崩壊させることでした。この戦略は1991年のソ連崩壊で、思ったより早く実現しました。

次はイスラムに対してです。キリスト教が巻き返すには、健康な教皇が中心となり、戦略を立て、実行していかなければなりません。そのため、異例の生前退位となったわけです。次の教皇（アルゼンチン共和国出身）が、地球のどこの出身であろうと、路線は同じです。こう考える根拠が文献にあります。

『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』（岩波書店）。2004年4月19日ミュンヘンで行なわれた、現代を代表する哲学者ユルゲン・ハーバーマスと、当時枢機卿であった前ローマ教皇ベネディクト16世（ヨーゼフ・ラッツィンガー）との討論会をまとめたものです。

その34ページに詳しく書いてあるのですが、大まかにまとめますと、これまで接点のなかった2人を接近させたのは、アルカイダをはじめとしたイスラム過激派の^{たいとう}台頭です。

近年の不安の種は、世界大戦のような大きな戦争ではなく、いつどこで襲ってくるかわからないテロであると、2人は語り合っています。しかもテロが、力なき抑圧された民族からの強者の傲慢に対する答え＝正義の刑罰、となっていることを問題視しています。さらに2人はこうした人類の新たな^{やまい}病を“内部から封じ込める”にはどうしたらよいかを話し合いました。この内部から封じ込める、というのがポイントです。

――諸侯を集めて十字軍結成して、どこかに攻め込むという戦争じゃないわけですね？

佐藤 ベネディクト 16 世（ラッツィンガー）は、欧米における神様を信じていない世俗的合理主義者と連帯して、アルカイダのようなイスラム過激派を封じ込めないとならないと言っています。

だから、無神論者のハーバーマスとの討論会を持ったのです。もっとも、ハーバーマス自身も、序盤の 14 ページあたりで、イランの首都テヘランはいま、ナチスが台頭してきたワイマール共和政時代のドイツの雰囲気を感じると、言っています。

一方で、哲学は、異文化対話を通して、なぜ現代において宗教が存続しているのか、知的挑戦として、真剣に取り上げるべきとも強調しています。

――彼らは、何をやるつもりなのですか？

佐藤 それは、“対話”です。対話による封じ込めを考えているのです。

――対話といっても、一体どうやるんですか？

戦争をしないで、話し合いで封じ込めると言っても、相手はアルカイダですよ!?

佐藤 異文化対話を通じて、イスラム穏健派を味方に付けて、アルカイダのような過激派を封じ込める。

その前提として、神様を信じていない西欧の無神論者たちも同じ文化圏の人間である、という考えに立たないとはいけません。また *corpus christianum*（コルプス クリスチアヌ

ム) の中では、神はいなくなるかもしれないけれど、その価値観はみな一緒である。だから、このみなが共有する価値観をもって外交し、イスラムを封じ込めていく。

——corpus christianum ってなんですか？

佐藤 ラテン語で、「キリスト教徒の身体」「キリスト教共同体」という意味です。少し詳しく説明しますね。

アメリカは、かつて「人種の^{るっぽ}坩堝」と言われましたが、いまは、「民族のサラダボール」と言われています。確かにサラダボールの中にはいろいろな野菜が混ざってはいますが、これはニンジン、これはキャベツ、これはコーン、と全部分けることができます。同じように、アメリカも黒人、白人、ヒスパニックなどなど、いろいろな人種が住んでいますが、混ざっているわけではないですね。だから「民族のサラダボール」です。

それに対してヨーロッパは、大きな3つの文化が混合して、全部、野菜が溶^とけてしまっ
て、ピューレ状になっている状態です。

その3つのものとは、

- ① ユダヤ・キリスト教の一神教の伝統
- ② ギリシャ古典哲学の伝統
- ③ ローマ法

これらを全部合わせて、ラテン語で“corpus christianum”というのです。

これが、ヨーロッパを形成している根幹の価値観なのです。

——なるほど。ただ、その価値観でイスラムを封じるなんて、可能なんですか？ 相手は、自分の身体に爆弾巻きつけて、自爆テロをして、それが正義の刑罰、と考えている人物たちですよ？

佐藤 だからこそ、イスラムを封じ込めるためには、まずイスラムの穏健な人間たちを味方につけ、価値観を浸透させていくことが必要なのです。先ほどの“内部から封じ込める”というところにつながります。

——穏健派を味方につけ、過激派を内部から説得させようという流れですか。

佐藤 少し違います。最終的には、アルカイダなどの過激派の絶滅を考えています。

そのために対話し、イスラムの中に味方を多数つくっていきます。そして、味方についたイスラムの穏健派の人間たちが、「テロ行為をする過激派がいると、俺たちのイスラム教が、世界から『変』だと思われてしまうぞ。そうならないためにも、過激派には退場願おう、撲滅しよう」と。そういったシナリオを描いているのです。

——同じイスラムの中で、イスラム同士で始末させるつもりなんですね。その狡猾こうかつさにちょっと背筋が寒くなりました。

佐藤 バチカンとイスラムの関係を見てきましたが、同じような観点でバチカンと中国の関係を読み解くと、バチカンの対中国戦略は今後、両者の間に緊張をもたらすことが予想できます。

いまの教皇フランチェスコ1世の下で、バチカンは中国に対して、対話を通じて、ソフトな巻き返し戦略を図っていくと、私は見えています。

――まさに、対イスラムと同じじゃないですか？

佐藤 おそらく、イスラムが解体するのは時間の問題、とバチカン側は見ているはずですよ。

――だから、次は中国？ あれ、でもそもそも、なぜ対中国戦略をとるのですか？

佐藤 中国政府はいまだに、国内カトリック教会の高位聖職者の人事権が、バチカンにあることを認めていない。

だから、バチカンと中国の間には、外交関係が存在していないのです。

――中国国内のカトリック教会の高位聖職者は、中国が認めた人物。でも、バチカンはバチカンで、高位聖職者を決める人事権は自分たち側にあるのだと主張している……なんだか、先に教皇が複数いた時のことを聞きましたが、その中世のような感じですか？

中国共産党は、徹底的に抵抗しますよね？ なんととっても中華の自分たちが中心とい

う意味で、それを国名にしているのですから……。

佐藤 抵抗はするでしょうが、バチカンによる対中包囲網で、やはり内側から崩されていくと思います。バチカンは、200 から 300 年のスパンで世界戦略を練りますから。

〈つづく〉

今月の内容をより深く学ぶための本

『ふしぎなキリスト教』（講談社現代新書）
橋爪大三郎／大澤真幸著

『同志社大学神学部』（光文社）
佐藤優著

『キリスト教史』（日本 YMCA 同盟出版）
藤代泰三著

『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』（岩波書店）
ユルゲン・ハーバーマス／ヨーゼフ・ラッツィンガー著

フロリアン・シュラー編 三島憲一訳